阿弥陀如来坐像

この坐像は阿弥陀如来であり、西方浄土の仏陀である。888 年に仁和寺の本尊としてつくられた。この像は日本における最古の阿弥陀如来像であり、下向きの目線やなめらかな木彫りの曲線が穏やかな存在感を示している。阿弥陀は、死と生の永遠のサイクルから抜け出して、西方浄土（または極楽）での転生を与えてくれる存在として、仏教の修行者にとっては重要な存在である。しかし、この阿弥陀像は、より世俗的な意味での重要性を持っているという点で特別なものである。この像は、仏像の日本化の始まりを示す重要な作例なのである。インドで生まれた仏教は中国を経由して 6 世紀に日本に伝わった。それと同時に、大陸の彫刻技術も日本に伝来し、奈良時代（710〜794 年）に盛んに実践された。しかしながら、日本の仏像が大陸の前例を離れて独自のスタイルを持つようになるには、しばらくの時間を必要とした。実際、一木造りでつくられているこの阿弥陀如来像は、平安時代（794〜1185 年）の間に進化を続けた日本的な彫刻というジャンルの出発点を示すものとして、高く評価されている。この像はその手の位置から阿弥陀如来像と同定することができる。両手の親指と人差し指が円を形作っており、その両手は座った姿勢の仏陀の膝の上、腹の前に置かれているが、この瞑想のポーズをとるのはほぼ阿弥陀如来像のみなのである。